

令和5年度宇都宮南高等学校 学校自己評価(教科 学習指導についての学校関係者評価の参考資料)

		(1)主体性の育成	(2)確かな学力の育成	(3)内外に開かれた教育環境（働きやすい職場環境を含む）の整備
本年度重点目標		① 自己有用感、自己指導能力（生徒自ら考え判断し、適切に行動できる力）を育む指導 ② 学校の特色化に資する文武両道の奨励 ③ 進路指導の充実	① 丁寧で分かる授業の充実 ② 家庭学習・自主学習等の習慣化に向けた工夫・改善 ③ 教職員研修の充実 ④ 新旧２つの学習指導要領への対応と評価	① 働き方改革の推進 ② 事前、個別、事後を意識した危機管理の徹底 ③ 教職員の心と身体の健全化
国語科	具体目標	○幅広いジャンルのテキストを、問題意識を持ちながら主体的に読ませ、物事を多角的に捉える力を身に付けさせる。 ○自身の進路に応じた読書活動に主体的に取り組ませ、進路研究や受験に対応できる素養を身に付けさせる。	○基礎的知識の定着を図る。 ○様々なテキストの具体的な読解の方法を身に付けさせ、読解力を養う。 ○多様化する現代社会の中での主体的な判断と行動に繋がる論理的思考力を育て、自ら学習に向かう姿勢を身に付けさせる。	○３年間の見通しを持った学習計画のもと、国語科として実施する学習活動を精選し、教員の負担を減らしつつも生徒の学力と主体性を育成する効率的かつ効果的な学習活動を実施していく。
	具体方策	１）漢字や単語の学習、速読教材の活用により語彙力を高めさせる。 ２）論理的文章の読解により論理の展開を読み解かせ、要約する力を養う。 ３）古典の語彙や文法、表現の特徴を理解させ、読解する力を養う。 ４）読書活動記録をつけさせ、幅広い教養と見識を養う。	１）様々なテキストを読むうえで活用できる知識の定着を図る小テストを実施する。 ２）授業内容を理解するだけでなく作品読解を通して、どのように読むか、読解のプロセスを身に付けさせる。 ３）文学作品や評論が提起する問題を自己の内面に引きつけて考えさせることにより、社会や人間の在り方についての考えを深め、関連する他の作品や文章にも興味を持たせ、主体的な学習へつなげる。	１）国語科として３年間でどのような生徒を育成していくのか共通理解のもと学習活動を教科内で検討し、教科内はもとより、他教科とも連携しながら効率的かつ効果的な学習活動を実施する。そのうえで、業務の精選・改善を図り、教員の負担軽減につなげる。
	段階評価		B	B
	評価理由	１）漢字小テストや速読教材を活用し、語彙力向上に取り組むことができたが、模試の結果等を見ると、語彙力の定着に課題が残る。 ２）主に現代文Bや現代の国語において要約をする活動を取り入れることができたが、要約が苦手な生徒が一定数いる。今後も週末課題等も活用しながら、要約力を育成する活動を継続していきたい。 ３）授業中に古典の語彙、文法等の解説、指導をしているが、なかなか定着しないのが現状である。粘り強く繰り返し指導していきたい。 ４）各学年で図書館を活用する機会を設け、読書の記録を定期的につけさせることで、読書への興味・関心を喚起することができた。	１）各学年で小テストを実施することができた。知識の定着にはまだ課題が残るため、授業や模試等の機会を活用し、学習意欲の向上を図り、定着させていきたい。 ２）授業中に読解のプロセスを指導することはできたが、生徒たち自身が活用できる段階にまでは至っていない。問題演習等を通して、読解の方法を活用する機会を多く設ける必要がある。 ３）様々な素材文を読む中で、言語活動を取り入れ、社会や人間の在り方について考えを深めさせる活動を取り入れることができた。生徒たちは互いの意見を活発に交換する姿勢が見られた。	１）新課程になる学年の指導内容について教科担当内で学習活動の検討はある程度できたが、他教科との連携にまでは至らなかった。小テストの内容や実施の方法、週末課題のチェックの教員負担軽減が一部できたが、まだ検討、改善が必要である。国語科としてどのような生徒を育成していくかを検討し、新教育課程における教員の負担軽減につなげていきたい。
地歴公民科	具体目標	○自己有用感、自己指導能力の向上につながるよう、学習に対する自己の取り組みに自信を持たせられるような働きかけを継続する。 ○生徒の進路実現につながる指導、研究を推進する。	○丁寧で分かる授業を意識した、生徒の実情に合った授業を展開する。 ○家庭学習・自主学習等の習慣化につながる生徒への働きかけを行う。 ○教職員研修の機会を設け、またその情報共有を図る。 ○特に新学習指導要領に対応できる教科としての体制を構築する。	○業務の効率化、一人に業務の負担が集中しない体制の構築により、働き方改革の推進、教職員の心と身体の健全化を図る。 ○様々な情報を教員間で共有することで、危機管理の徹底につなげる。
	具体方策	１）適正なレベルの定期試験を作成する。 学習を振り返る機会を設定する。 ２）入試問題等を研究し、その成果を授業、テスト作問に活かす。授業内や課外など様々な機会を利用し、志望大学合格に向けての集団・個別指導を積極的に行う。	１）ICT機器の活用ほか、丁寧で分かる授業につながる取組を、各自で創意工夫、実践する。 ２）予習・復習の指示、課題の提出・確認など継続的に実施する。 ３）研究授業（及び授業研究）、教育課程研究協議会、地歴・公民部会（講演会）など分担して実施・参加するとともに、その情報を共有する。 ４）昨年度新課程生の授業を担当した教員からの情報提供、助言を積極的に行う。	１）業務分担を明確にする。 不要な会議は縮減する。 ２）回覧や校務用データへのファイル保存により多くの情報を共有する（特に成績評価の裏付けが確認できる体制の構築）。
	段階評価	B	B	B
	評価理由	１）科目間・試験間でバラつきはあるが、多くの科目で平均点60点前後の適正なレベルの定期試験が作成され、また、担当者それぞれの方法で振り返りの機会も設定できた（紙のほかFormsを利用する形も）。生徒に自己の取組に自信を持たせられる働きかけができた。 ２）外部模試等をもとに新しい出題傾向を研究し、テスト作問に活かすことが多くの科目でできた（授業時の会話のやりとりをもとに解答する、資料等の情報と知識を結び付けて解答するなど）。また、進路実現に向けての集団指導も積極的に行うことができた（個別指導は相談への対応の形で）。	１）多くの教員が様々な形でICT機器を活用する授業を実践した。事象の背景やつながりを深く理解するための丁寧な説明なども行い、生徒の実情に合った授業ができた。 ２）折に触れて予習・復習を指示したり、試験後・長期休業後などに課題を提出させ確認したりすることで、家庭学習・自主学習等の習慣化を促すことができた。 ３）分担して教職員研修の機会に実施・参加することはできたが、その後の情報共有は十分にできていないところもあった。 ４）部分的に情報提供、助言を行うことはできたが、積極的とはいえ、新学習指導要領への組織としての対応には課題もあった。	１）主要な業務は年度当初に分担・明記し、小論文・面接指導など年度当初には分担が困難な業務も、それぞれの仕事の状況に応じて割り振りを行い、回覧時の資料で情報共有した。また、回覧を利用することで、可能な限り会議も縮減できた。働き方改革につながる取組を十分に行うことができた。 ２）回覧等により情報を共有することはできたが、校務用データへのファイル保存は徹底しないところもあり、危機管理のための取り組みは引き続き模索していく必要がある。
数学科	具体目標	○授業時の主体的な活動を通して、学ぶことに興味や関心をもたせ、粘り強く取り組む姿勢を育てる。	○身の回りの事象を数学的に解釈し、表現・処理できる能力の伸長を図る。	○教科担当者間での情報の共有を図る。
	具体方策	１）対話やグループ活動を通して、自己の考えを深めたり広げたりする、あるいは他の意見を検討するなど生徒同士で学び合える教育活動を実施する。 ２）様々な解法を探索する中で、考え方の多様性を育む。	１）研究授業の実施および研究協議の充実やICT活用法の共有により、授業力の向上を図る。 ２）生徒の実態に即した課題の提示やテストを実施し、骨太な学力を育成する。 ３）新旧２つの学習指導要領に即した指導と評価の一体化を図り、情報を共有する。	１）授業進度や指導法・教材の工夫などの情報を共有・蓄積し、学年を超えた指導の充実を図る。 ２）教員間の協働を図り、風通しのよい環境を作る。
	段階評価	B	B	A
	評価理由	１）生徒同士、グループで学び合う活動の時間は昨年度よりも取ることができた。 ２）考え方の多様性を育むまではできなかった。	１）中堅研と合わせた研究授業ができ、参考になった。しかしICTの活用まではできていない。 ２）課題やテストを適切に実施できているが、骨太な学力の育成まではつなげることができていない。 ３）評価に関してはまだ検討が必要。	１）２）週１回の打ち合わせだけでなく、担当者間で授業進度の確認はできているが、教材の工夫や情報共有までは十分とはいえない。教科の雰囲気は話しやすく、風通しは良い。

理科	具体目標	○授業や探究の過程をととして、科学的思考力を育成するとともに、自発的な発言・行動ができるように促す。	○生徒個々の能力や進路に応じた学習方法を確立させる。	○実験・実習における安全管理を徹底し、生徒への周知と職員間の連携に努める。
	具体方策	1) 授業中の発問を工夫することにより、常に思考する姿勢を生徒に身につけさせる。 2) 実験をととして、授業で学んだ知識を深化させるとともに、社会や身の回りの現象との関連に気づけるよう指導する。 3) 生徒の進路希望を把握し、授業や課外で生徒に適切な指導をする。	1) 思考の過程を重視し、単なる丸暗記に終わらないよう日頃から指導する。 2) 生徒の理解度や到達度に応じた小テストなどをこまめに実施し、基礎力の確実な定着を目指す。 3) 新学習指導要領に即した指導と評価の一体化を図る。	1) 実験室等のこまめな整理整頓を心掛ける。 2) 生徒自身の安全に対する意識を高めさせるため、「実験室の使い方」や「実験をするときの注意」についてガイダンスを行う。 3) 有事の際に早急に適切な対応ができるよう、日頃から教科内の連携を図る。
	段階評価	A	B	A
	評価理由	1) 発問を工夫してきた。しかし、生徒の思考がその場限りであり、深化という点では課題が残る。 2) 身の回りの現象と関連づける実験を行うことができた。また、単元末に社会や身の回りの現象との関連を調べさせた。 3) 年度初めに進路希望調査を行って授業の内容や進度を調整した。年度初めに課外の目的や年間計画を生徒に周知して、課外を実施した。継続して受講する生徒が例年より多かった。	1) 思考の過程をパターン化し、具体的な方法を生徒に伝えることができた。 2) 単元によっては実施できた。もっとこまめに時間をとって実施できればよかった。 3) 教員が様々な指導方法や評価方法を学び、改善し続けていかなければならない。	1) 物理準備室の整理整頓を入念に行った。整理整頓することで教材教具を把握しやすくなり、科目を横断して教材を使用することができた。 2) ガイダンスは行った。しかし、実験の説明を聞かずに勝手な行動をとる生徒も多かった。 3) 教科打合せをまめに行った。実習教員が化学準備室に常駐することで、準備室の配置上、科目間の連携がスムーズになった。
保健 体育科	具体目標	○心身の調和のとれた発達を促し、健康で安全な生活を営む態度を養う。 ○自主的な授業への取組により、生涯にわたって豊かなスポーツライフが継続できるような実践力が身に付く指導に努める。 ○教科横断の指導で体力・技術の向上及び社会的態度を育成する。 ○全ての指導において、礼法指導等を通じた道德教育を行い、状況に応じて主体的に考え実践する態度を養う。	○体育や保健での積極的なICTの活用 ○科内のICT活用術の共有 ○3観点についての評価方法の研究 ○3観点に基づいた授業内容の研究	○未然防止に向けた取組（事前の危機管理） ○危機発生時の対応（発生時の危機管理） ○対応の評価と再発防止に向けた取組（事後の危機管理）
	具体方策	1) 保健や体育理論で運動の重要性を理解させ、体育で実践させる。 2) 体育委員や種目リーダーを中心に個人や集団の課題解決ができる生徒全体の授業展開を促す。 3) 自校体操やサーキットトレーニングの効果を理解させ自発的に取り組めるよう支援する。 4) 教官室の出入りや先生方への言葉遣いについての礼法指導を徹底する。	1) 研修等で知識を習得し、校内で共有しながら授業内容を研究を進める。 2) 習得した知識や既有的知識を使い、動きと場を変容させたり、理想の動きと自己の実態を比較したりして立てた計画を実行させる。 3) 計画して実行した運動内容を評価したり、改善策を考えたりすることを通して、自己の運動を振り返らせる。	1) 過去に発生した事例の危機発生の原因や経過等の分析・検討、また生徒・保護者からの情報収集により、問題の早期発見に努め、危機に至る前に解決するよう取り組む。 2) 日ごろから、一人一人の生徒への継続的な支援や施設・設備に関する定期的な点検等を行い、危機の未然防止に努める。 3) 連絡ツールを活用し、報連相確を充実させる。
	段階評価	B	B	B
	評価理由	1) 保健や理論の授業の際に適宜、運動の必要性や生涯スポーツの大切さに触れることができた。 2) 体育委員や種目リーダーは、責任感を持ってよく取り組んでいた。 3) 体育理論も活用し、サーキットトレーニングの重要性を理解させ、積極的に取り組ませた。 4) 入室や退室の挨拶や先生方への言葉使いはおおむね良好であった。	1) 自己の課題設定については、個人種目（水泳・陸上）では、より明確に設定することが出来た。 2) 球技においては戦略を考え戦術や作戦をたてゲームを行っていた。 3) 振り返りを行うことでより自己やチームの動きを確認することが出来た。	1) 保健の授業などを活用し事前の危機管理を行った。 2) 定期的に点検等を行い危機の未然防止に努めた。 3) 連絡を密にとりあい、体育的行事や授業を大きな事故なく実施できた。
芸術科	具体目標	○芸術文化について理解を深め、望ましい人格の完成を目指す。 ○興味関心を持って積極的に授業に取り組みながら、芸術を愛好する態度を養い、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てる。	○生徒の言語活動の向上を目指した授業を実践する。	○教科間での情報共有 ○使用教材の精選
	具体方策	1) 諸活動を通じて基礎的知識・技能を習得し、表現力・想像力を育成する。 2) チャイムtoチャイムの徹底と1分前授業準備。 3) 教材や備品等を大切に扱う。	1)生活の中に美的感動を発見する態度を養う。 2)自他の作品や発表を鑑賞し、根拠を持って批評・評価を生徒間で行う。	1) 音美書教科間で各クラスの生徒の様子や雰囲気等の情報を共有し、問題の早期発見・早期解決に取り組む。 2) 使用教材を衛生面からも工夫をし、安全を確保して学習に取り組ませる。
	段階評価	A	A	B
	評価理由	1) 基礎的知識・技能について、個々により段階が異なるがおおむね習得し、表現力や想像力が身についてきている。 2) チャイムがなる前には準備を終え、時間いっぱい充実した学習活動ができた。 3) 楽器や道具などを大切に扱うことから、技術や表現力が向上することに気が付かせた。	1) 学習した内容を日々の生活の中でも生かすようアドバイスを行うことで、ふとした日常に美的感動があることに気が付かせる指導を行った。 2) グループ活動等で他者の発表や作品に真摯な態度で向き合い、共感的な立場で批評・評価を行わせた。その結果、よりよい雰囲気の中で学習活動を行うことができた。	1) 音楽の発表会に美術・書道の生徒が参観するなど。教科間の連携を深める工夫を行った。美術や書道の作品も他教科の生徒が観覧できる工夫を行っていた。 2) コロナ感染症V類移行を受けて、昨年度のような感染症対策は行わなかったが、引き続き衛生面に留意して学習に取り組ませた。
英語科	具体目標	○基礎学力の充実を図るために授業を大切にする姿勢を養成する。 ○英語の知識を深め表現力を高めるとともに、視野を広げ積極的にコミュニケーションを図る態度を育成する。	○上位者を伸ばすための個別指導、不振生徒の早期発見、早期指導に努める。 ○学習意欲喚起に向けた指導を工夫する。	○教科間での情報共有 ○使用教材の精選
	具体方策	1) 予習・復習の徹底を図る。 2) 真摯な態度で授業に取り組ませる。 3) 小テスト等により継続的学習を促す。 4) 各種大会への参加を促す。 5) 読書や新聞、インターネット等、様々な媒体を使い教養を高めるよう指導する。	1) 上位者への個別指導を徹底する。 2) 週末課題、朝学等により家庭学習を習慣付ける。	1) 外部模試の紹介や案内を充実させる。 2) 教科打ち合わせなどを活用し、生徒理解のための情報共有の徹底を図る。
	段階評価	B	B	B
	評価理由	1) 予習をして授業に臨む生徒が多い。 2) 各学年とも小テストを実施し、small stepを設定することにより継続的学習に結びついている。 3) 弁論大会への参加希望者がいなかった。年度初めから周知するようにしたい。 4) 新聞記事やエッセイを多読プリントとして配布し、様々な媒体の文章に触れさせることができた。	1) 土曜課外などで上位層への意識を高める指導はできたように思う。 2) 週末課題もレベル別で配布することにより、無理なく学習の継続に繋げることができた。 3) 下位者の指導に追われてしまった。	1) 英検等外部模試の案内はできた。 2) 教科打ち合わせで情報共有はできていたが、生徒理解のための情報共有という点では、不十分な点があった。 3) 他教科の先生にも授業を見てもらう機会があり、いろいろ異なる角度から意見をいただけた。

家庭科	具体目標	○家族や友人・地域の方との交流の中で相互扶助の気持ちを持たせる。 ○自ら考え行動できる力の育成・向上を目指す。	○学校（知識、体験）と家庭生活（実践、定着）をつなぐ授業を実施する。	○安全・衛生面の徹底と定着
	具体方策	1）話し合いを通し、他者の考えを知り共有していく機会を多く取り入れる。 2）授業で得た知識や技術を実生活の中で活用できる力を養う。	1）ホームプロジェクトを活用し、実生活の中での実践する主体性を養う。 2）生徒の生活実態に応じた教材を検討・提示し、定着を図る。	1）共有備品・使用教室の使い方の指導と整備、消毒の実施に努める。
	段階評価	B	B	A
	評価理由	1）毎時間、周囲の生徒と話をする発問を行うことができた。 2）実習で得た知識や技術は活用してみようという気持ちになっている生徒が多いが、座学の知識については関心が薄く不十分であった。	1）授業で学んだ知識を活用した実践を、夏季休業中の課題とし、取り組ませることができた。 2）特に映像教材や調理実習の献立について検討・提示できた。	1）備品や教室を安全に清潔を保ちながら使用することができた。
情報科	具体目標	○主体的な活動を通して自己有用感、自己指導能力の育成に努める。 ○発表する機会を通して他者と認め合い、自他を尊重する姿勢を育む。	○主体的に問題解決に取り組むことで、メディアリテラシーを育む。 ○新学習指導要領に即した指導と評価の一体化を図る。	○教科担当者間での情報の共有を図る。
	具体方策	1）学習課題を提示し、どのように解決するか自ら手順を考え、実行させるようにする。 2）自分でテーマを設定しプレゼンテーションを作成することで自己を客観視させる。さらにクラス発表を通して他者を尊重する姿勢を育む。	1）Teamsを活用した課題配信・添削を実施し、生徒の到達度・進度に即した指導で骨太な学力を育成する。 2）理論の学習と実習のそれぞれの場面に応じた規準を検討し、評価する。	1）情報を共有し、風通しの良く、生徒の事を第一に考えた仕事ができるようにする。 2）使用教材や資料を可能な限り共通化し、業務の効率化を図る。
	段階評価	B	B	B
	評価理由	1）2）自分を見つめ直し、それをどのように伝えるかを考えることで、プレゼンテーション能力を育むことができた。さらに相互発表により、自分がどう評価されるか、また、他人の知らない一面を知り、他者と自分との関係を再構築する機会になった。	1）2）規準についてはまだ検討の余地があるものの、1・2年生において観点別評価を実施した。また、課題配信やアンケートをTeamsで行い、授業に活用することができた。	1）2）授業用パワーポイントなど、ある程度の教材を共有し、効率化を図ることができた。また、情報交換をこまめに行い、新課程に対応した授業をすることができた。

1. 段階評価：学校関係者による段階評価も含め、A・B・C・Dの4段階評価
2. 評価基準：[A・・・十分満足できる B・・・概ね満足できる C・・・努力を要する D・・・一層努力を要する]
3. 評価理由は、目標達成に向けた取組の状況や生徒の学習の状況などを視点として記述する。